

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 79 号

平成20年11月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

ウィリアム・バークレー

「希望と信頼に生きる ウィリアム・バークレーの1日1章」

（柳生直行訳・ヨルダン社）より（6）

5月3日 ダイナミックなもの

「私を離れては、お前たちは何もできない」とイエスは言った（ヨハネ15・5）神を必要とする理由、神をもたねばならぬ理由がいくつかある。

なにをなすべきかを示してもらうために神を必要とする。...

正しいことを行なうための勇気を必要とする。

現在のところ、正しいことが簡単にできるというようなことはめったにない。面倒なことは避けて、易きにつこうとするのが、人間のもって生れた性質である。正しいことをやる勇気を与えるのは神のみである。正しいことを知ることと、それを実行することとは、全く別のことだからである。

正しいことを達成せしめる力をわれわれに与えるのは神のみである。

われわれは、道を照らしてくれる光を必要とする。正しい道へと押出してくれる勇気を必要とする。しかし、ほんとうに難しいのは、なにかをはじめることではなくて、それを最後までやりつづけることである。

5月4日 通りすがりの人

道路上に倒れたまま動かぬ一人の人間のまわりに、三人の人がかがみこんでいた。一人はその交通事故の犠牲者の女友だちで、気が転倒して全く力が抜けてしまっていた。二人目は人だかりのなかから進み出て、できることがあれば手を貸そうとしている人であった。3人目はお巡りさんで、自分の上着を脱いでその倒れている女性のまくら代りにし、応急手当をほどこしていた。

これは人生の縮図とっていい。他人の不幸や災難に対して、人はどういう反応を示すか、ということがこれでよく分かるのである。

この事故の原因となった人間がいた。...

足を止めようとしめない群衆がいた。...

ただおろおろするだけでなにもできない友だちがいた。

誰かが災難におちいつている、あるいはおちいろうとしているのを見ながら、自分はなにもやってやれないというのは、この上なく痛ましい、絶望的な経験の一つである。なにもできないで、ただそばに立っていなければならぬというのも、この上なく不幸な経験の一つである。

群衆のなかからただ一人、手助けをしようと進み出た通行人がいた。...

口を開けて見ている群衆がいた。

奇妙なことだがこの世には、他者についての良い知らせよりも、悪い知らせのほうを喜ぶ人たちがいるものだ。他人の不幸を、好奇の目で、ぽかんと口を開けて見ることくらい低劣な行為は、めったにない。

お巡りさんがいた。 人びとを助けることを仕事とし、また助ける用意のある人がいた。彼がとっさに感じたことは、その場から逃げ出すことでも、ただ突っ立って見ていることでもなく、災難に会った人のところにとんで行ってなにかをしなれば、ということであった。これこそクリスチャンの態度である。

5月5日 手放しなさい！

教会がほんとうに大切なことだけに集中すべき時があったとすれば、いまこそまさにそのときである。教会がキリストを選ぶか、混乱を選ぶか、という二者択一を迫られる状況に立ったとき、教会がなすべきことは最高に重要な事柄にのみ集中して、それ以外のことはすべて放棄する、ということである。

レッテルを手放さなければならない。

リベラル、ファンダメンタリスト、過激派、保守派 人びとを相対立する党派に分断するこういったレッテルは、捨てなければならない。近づき方は違っても、私たちはみな神の言(ことば)を愛する人間なのだから。

セクト関係を捨てなければならない。

長老派、バプテスト、組合派、アングリカン こういった宗派の別をなくさなければならない。SCM(学生キリスト教運動)、IVF(キリスト者学生会)、CU(教会同盟)、SU(聖書同盟) こういった分派への忠誠も捨てなければならない。...

私たちは宗派や党派のメンバーなのではなくて、クリスチャンなのである。クリスチャンが一致して立ち上がらなければ、とうてい悪に対抗することはできないだろう。

制度上の相違を捨てなければならない。

監督か長老か、幼児洗礼か成人洗礼かといった問題、聖職授与の問題、聖職有効性の問題など、すべて放棄しなければならない。...

古いけんかはやめなければならない。...

今日の教会は、全体的に、老衰しかつ交替しつつある一方、異教化と世俗化の波は、ますます高く強く押し寄せている、いまこそ、多くの事柄を手放して、一つのこと すなわち、われわれは、次第にキリストを失いつつある世界にあって、イエス・キリストを代表しているのだという事実 に集中すべき時である。

5月10日 忍びたもう神

神が留守をするときはない。

神にはきまった勤務時間も半どんもない。眠ることもまどろむこともない。神はつねに神の子たちの声に耳をかたむけておられるのである。

神にとって小さすぎることはない。

ジョン・ベイリーがどこかで言っている、「心配ごととはどんなに小さくても祈るに足る」と。心配すべきことかどうかを知るには、それを神のもとにもっていきのがいちばんいい。神のおん前では、すべてのことがありのままの姿を見せるからである。

神のところにもっていくには私的にすぎる、というようなものはない。

私たちは人のところにはもっていけないことも、神にはもってゆける。...

恥ずかしくてとても神のところにもっていけない、というようなものはない。

人には隠しておきたいと思う事柄がある。いや、自分にさえ隠しておきたいと思うくらいである。こうして、一生けんめい隠そうとして、神経衰弱になったりすることがある。しかし、神に対してなら、いい話と同様、恥ずかしい話ももっていくことができるのである。...

神の偉大さの中でも特に偉大なのは、その忍耐心であろう。アウグスティヌスがいったように、神はわたしたちひとりひとりを、まるで世界に愛すべき人間が一人しかいないかのように愛したもう。

そして、愛こそが忍耐の秘訣である。その点、神も人間も変わりがない。

5月11日 遅すぎることはない(1)

グラスゴー大学で私の職責の一つは、ヘレニズム時代のギリシア語を教えることである。この講義をとる学生は少ない。非常に特殊な専門科目だからである。もっとも新約聖書を原語で読みたいという人には必須の科目ではあるが。

ある日、わたしはひとりの婦人から手紙を受け取った。彼女はグラスゴー大学の有名な女学校で教師をしていた人である。教育界における名誉ある長い経歴を全うして引退したところであった。60歳を過ぎていた。その手紙によると、彼女は新約聖書をギリシア語で読みたい、とかねがね思っていたという。いまは引退したので、そうする時間がある。そこでお願いがある 学生としてギリシア語のクラスに出てもよいか ということであった。

答は一つしかなかった あなたをお迎えするのは私の喜びであり、また名誉であります、とわたしはそう返事した。こういうわけで、新学期の始まる10月からこの60歳をすぎた老婦人が、大学の固い椅子に腰かけて、彼女の年の3分の1くらいの若い学生たちと一緒に講義を聞き、ノートを取るようになったのである。

これは「遅すぎることはない」ということのすばらしい実例であると思う。

学ぶのに遅すぎるということはない。

カトーは、ギリシア文化がローマに侵入していたころのローマ帝国に生きていた。彼がギリシア語を習いはじめたのは、80歳のときであった。

モーツァルトはたいへん若くして死んだから、年齢的には老人ではなかった。が、すでに大作曲家として名を成してからも、対位法と音楽理論のレッスンを受けていた。

いつまでも生命にあふれていたいと思うなら、学びつづけなさい。

肉体は生きているが、精神的・霊的に死んでいる人がはなはだ多いのは、一つの悲劇であるといっている。

5月12日 遅すぎることはない(2)

もう一度学校に行くのに遅すぎることはない。

ジョン・ベイリーはエミール・カマルツがつぎのようにいったことを指摘している。若い人が人生に乗り出すに当たってまず第1に覚えておかなければならないことは、人生という書物は最後のページを読み終るまでけっして閉じてはならないということである、と。クリスチャンは幼な子のようにでなければならぬといわれている。ところで幼な子の特徴は、学習の時期にあたる...ことである。

わたしたちがみんな、毎年なにか新しい問題について学ぶようにしたなら、人生に対する深い興味をもちつづけるという意味においても、たいへん結構なことであろう。

新しく始めるのに遅すぎるということはない。

今日の神学校の特徴の一つは、年のいった人たちがたくさん入ってくるということである。学校の校長をしていた人とか、教育界で行政管理などに当たっていた人たちとか、あるいはまた産業界、実業界、新聞界などで高い地位にいた人たちなどが、神学校に入ってくるのである。

多くの場合、こういう年のいった人たちは神学校のなかでいちばん元気がよく、いちばん生きいきとしている。ほかの人たちにとって人生が終わったときに、彼らは新しい人生を始めたわけである。それが彼らの若さを保ち、彼らが身体も精神も魂も若々しい所以なのである。

一つの経歴が終ったときを新しい経歴の始まる時と考えたならば、多くの人々にとって、人生は今までと全くちがったものとなるだろう。今まで自分の時間を奪ってきた仕事が終わって、これからは自分がほんとうにやりたいと思っていたことをやるのだ、というふうに考えるべきではないだろうか。

すべてのものを新たにしてお方に強められて新しい世界を求めていくのに、遅すぎるなどということは絶対はない。

5月16日 チャンス

あなたは批判の対象を求めるのか、それとも称賛の対象を求めるのか。

たとえば、あなたの教会の聖歌隊が、祝歌とか、カンタータとか、オラトリオを歌った場合、間違ったり、うまく歌えなかったりする（そういうことはよくあることである）、それにとびついてけちをつけるのか、それともうまく歌えたところを取り上げてほめてやり、偉大な楽曲をてがけたのは、たといプロの水準には達しなくても、たいへん立派であるといってお励ましてやるのか。

あなたは人を励ますのか、それとも水をさすのか。

一つの活動方針が提案されたとき、あなたはすぐにその困難さを見てこれは不可能だと考えるのか、それとも可能性を見て、やってみる価値があると考えたのか。

あなたは恵みを数えるのか、それとも不幸を数えるのか。

有名な心理学者アドラーは、それぞれ片腕を失った二人の男のことを、どこかで、語っている。一年ののち、そのひとりには絶望して、こんなハンディキャップがあっても、人生生きるに値せずと結論するに至った。これに反し、もうひとりのほうは意気軒昂として、腕は1本あれば何でもできるのに、なぜ自然は人間に腕を2本与えたのか理解に苦しむ、などといってお歩いていった。

あなたは自分もっているもののゆえに神に感謝しているか、それとも失ったもののゆえに神を呪っているか。

あなたは困難な状況を災難と見るか、それともチャンスと見るか。

BBCの初代会長ジョン・リース卿がよく言っていたことを、もう一度思い出してみるのもいいことだ。「わたしは危機は好まないが、それが与えてくれるチャンスは大好きだ」。

あなたは危機を、すわって泣くときと見るか、それとも立って行動するときと考えるか。

5月19日 専門家

クリスチャンはほかの人たちにできないことができる人間でなければならない。

クリスチャンはほかの人びとには耐えられない失望に耐えられる人間である。...

クリスチャンはほかの人びとには負えない重荷を負える人間である。

それはその重荷を自分ひとりで負っているのではないということを知っているからである。わたしはあの立派なアメリカの主教であるクエイル主教の話が忘れられない。

彼は永年の間、教会のこと、牧師たちのこと、自分の仕事のこと、しなければならぬいろいろなことなどで死ぬばかりに頭を悩ましていた。さまざまなことで心労しながら夜半すぎまで起きているのがつねのことであった。ある晩、例によって心配しながらすわっていると神の声がはっきりと聞こえた。誰かが同じ部屋に座っていたかのように、じつにはっきりした声だったという。神はこういった。「クエイル、お前はベッドにいて休みなさい。私が一晩中おきていてやるから」。それからのちは、クエイルの心にすばらしい静けさとうららかなさが宿るようになった。彼は自分の重荷を主にあずけることを学んだのである。

クリスチャンは、他の人だったら押しつぶされてしまうような重荷を負うことができる。それは、自分一人で負わなければならないような荷は一つもない、ということを知っているからである。

クリスチャンはほかの人々には真似のできない仕方で、悲しみに耐えることができる。...

だがクリスチャンは、人生の失望や重荷や悲しみにぶつかっても、イエス・キリストのみが与える力と落ち着きと喜びとをもちつづけることができるのである。

5月20日 余分のもの

「人がもし君に一里行くことを強いたなら、一緒に二里行きなさい」とイエスはいっておられる(マタイ5・41)。これは、この上なく実際的な忠告である。余分のものがあるとないとでは、たいへんな違いだからである。

ことをなすに当たって、余分のものが大きな違いをもたらす。

なにかをやるにしても、にこにこしながらやるのといやいやするのとは、たいへんな違いである。積極的な気持ちのあるところではかならず能率が伴うとっていい。人生のあらゆる領域において家庭でも、仕事でも、勉強でも、遊びでも 心のもち方次第で大きな違いが出てくるものなのである。

人に何かを与えるにあたって、余分のものが大きな違いをもたらす。...

変な気持ちで与えるくらいなら、全然与えないほうがずっとましである。

この点についても、イエスは偉大な模範を示している。イエスは人びとに与えるとき、つねにご自身を与えたもうたのである。彼が人びとに何かを与えるとき、かならず身体から力が出て行った。だが、イエスがしぶしぶ冷たい態度で与えた例は、一つも見つけることが出来ない。...

福音書を読むと、みんな気がねせずにイエスに近づき、なんの心配もなく彼に助けを求めることができたこと、また彼に冷たくあしらわれたものはひとりもいず、みんなよろこんで帰っていったこと、が分かるのである。

贈物にせよあるいは行為にせよ、それに喜びが伴うのでなければ、ほとんど無意味である。贈物も大切であろう。しかし、余分のもの、つまり、それを贈る気持ちのほうがかもって大切である。

5月23日 ぐずぐずする

入り口でいつまでもぐずぐずしている これは人生のあらゆる領域でよく起きることである。

説教の場合もそうだ。

一つの主題について話をするとき、その周囲の状況や歴史的背景から話を始めることはたしかに必要である。しかし、前置きが長すぎて本題についてしゃべる時間がなくなってしまう、ということがよくある。説教は20分でも長すぎると考える現代のような時代には、特にそうである。

勉強でもそうである。

学問の入り口のところで引っかかって、なかに入れない学生がたくさんいる。むろん、それには理由があるだろう。...学問の周辺で立ち止まり、なかにある宝庫にはいつまでたっても到達できない。聖書についても同じことがいえる。そのゆたかな富を手に入れるには、大いに勉強しなければならない。

友情についてもそうである。

知人はたくさんいても、ほんとうの友だちは少ない、というのがふつうである。友情も努力を必要とする。友人の心の内なる聖所にまで入ってゆく努力、また自分の心の中を拡げて見せる努力が必要である。友情の本質は、おたがいに自己そのものを与えかつ受け入れるところにある。

イエスキリストに対してもそうではないだろうか。

イエスキリストとの関係においても、入り口でぐずぐずしている人が多い。彼らはイエスを尊敬しているし、...またクリスチャンになりたいと思っているかもしれない。だが、キリストは全き自己放棄を要求するものであり、キリスト教は完全に自分を賭けることを意味しているのである。だが多くの人びとはその手前のところで立ちどまってしまう。キリストを玄関までしか入れないのである。